



劇場型イノベーションの興しかた

「他者の人生を生きない。突き抜けるためにステ振りした」

株式会社 ChromaJean 代表取締役社長 三輪勝彦 2025.2.11

その気になりやすい方である。薬事日報社の再連載を引き受けてしまった。記者の村嶋さんから、「かなり反響があったので、もっと三輪社長について深掘りしてもらえたら、さらにウケると思いますよ」と申し出があった。

未だ現役、中二病の僕だ。努めて平静を装いながら「どうしてもと言われるのなら」とお引き受けした。鼻の穴がかなり膨らんでいたことは、隠しようがなかっただろう。

問題は再連載の内容だ。宴会の小噺ではないので安易な約束はしかねる。そこで薬事日報社の会議室に赴いて進め方を確認した。当日の協議を要約すると、だいたいこうなる。

「立ち会いは強くあたって、あとは流れでお願いします。」

世間を賑わせたお相撲さんのメールが、多様な交渉の場面で流用できることを知った。

思い起こせば、すべては村嶋さんが僕の愚行録に反応したことからはじまった。

「ソコですよ！コレまでは随分アレだった三輪社長だからこそ辿り着いた境地、追い求めてきたロマンを熱く語ることが読者の共感を生むんですよ！」

ドコなのか、ドレなのかをまず特定しないと、大火傷を負いそうな予感がした。

だが了解だ。歴史ある新聞社に求められる再連載のアウトラインが、これで決まった。

「クロマジーン社長、今度は自身の愚行録をロマンティックに語る。」



図1：イノベーションを起こすことを決めた夜、蛍の季節

劇場型イノベーションを興すために、僕が「ある一線を踏み出してきた」事例について、合計6回の連載で伝えていくことにする。あの頃の僕がコトの顛末を予め描いて行動したか否かは、不問とさせていただきたい。踏み出したその一線が「セーフ側」か「アクション側」か、すぐに判断できないからだ。もっとも経験則から言えば、これまでに踏み出した一步のたいていが多くの周囲を呆れさせ、怒らせてきた。疑義を避けるために明言するが、もちろんこうした愚行録はビジネスシーンに限定したものだ。

再連載の1回目は、「突き抜ける」ための心持ちについて触れる。ハラを決めてコンパスの針を突き立てる場所を決めることから始まる。マインドセットと呼ぶべきだろうか。あの頃の僕が踏み出した重要な第一歩だった。前職では日本を代表するエリート研究者達に囲まれてきた。僕は、有機合成化学の専門家集団に配属された。この中で一人だけクロマトグラフィーという異質な専門性を追求しようとする者は、確実に浮き、叩かれる。

「三輪くんは化学を知らんからな」にはじまり、「あいつは研究者ではない」、「本業の合成から逃げるな」、「ここでは合成を学ばないと将来はない」、「高専卒が偉そうに学者ぶるな」、「分離することしか能力がない」、「あいつは目つきが悪い」と罵詈雑言が続いた。

最初は親切心からの忠告だったのかもしれない。僕の業績や職位が上がるにつれて周囲の叱咤激励は異分子排除運動に移行し、尻上がりに誹謗中傷の声に変わった。そして最後のは完全に悪口だ。「ほっとけ俺のカオだ」と言いたい。

考えられる投下資源の中で、唯一平等に与えられているのは時間である。ヒトカドの人物になるためには、限られた自分の時間を何に賭けるか。ロールプレイングゲームでいうところの「ステータス振り」が必要だった。僕は、クロマトグラフィーを目指して持ちうる資源を「全振り」した。既存のロールモデルに従うふりをして、他者の人生を生きたくなかった。出逢って以来、憧れの対象になったルー・ゼンさん（前回連載の最終回参照、タケダ・サンディエゴの研究者）にどうすれば近づけるか、そこにしか興味がなかった。

そこで僕は、松木安太郎さんの「ステ振り」に着目した。サッカー解説者という彼の肩書には、今も違和感を覚える。ググってみると「解説」とは、何らかの客観的な専門知識に基づいて物事をわかりやすく説明することであるらしい。「説明」とは、中立的で主観を控えめに事象の内容・理由などを明らかにすることのようだ。

松木さんはどうだ。まず、主観とは言え公正さを著しく欠いている。対戦国の反則に激しく憤り、日本のそれには見て見ぬふりをする。次に、本来解説者として期待されるべき「客

観的な専門性」は、試合終了のホイッスルが鳴るまで発揮されることはない。「ハンドだろ！」
「オフサイ！」「ふざけたロスタイムですね」など、小学生レベルの悪口が大半を占める。

松木さんを解説者として括るのは無理があると思う。百歩譲って応援団長だ。それでも世間が彼を解説者と認定しているのであれば、松木さん一人が解説者の概念を変えたということだ。既存の物差しで測れない人になってしまった。それでいて需要も高い。

僕は、確信犯的にロールモデルを壊した松木さんの突き抜けぶりに惚れ惚れする。おそらく「解説者として論」を周囲や権威が注意しても、決して応じないだろう。

「従うメリットがないことには従わない。他者が持ち合わせない、自分のコアで勝負する。」これに尽きる。だが組織において、これをやり貫くことがどれだけ難しいことか。

僕は、コンパスの針の突き立てかたを松木さんから学び、勇気を得た。



図2：初夏のノエビアスタジアム神戸、尊敬する友人と

正直に話すと、僕は「初志を貫徹する鋼のメンタル」など持ち合わせていない。出逢うべき最高のタイミングで、出逢えた人に救われた。まるで仕組まれたかのように。

前職において僕が「突き抜けようとして、貫いた」事例には、重要な分岐点があった。

完全なるアウェイ雰囲気下で成果を上げたものの、異分子である僕の昇格に異を唱える声が多いことは嫌でも耳に入ってきた。「そんなにオレが悪いのか」と、ハートはギザギザになったものだ。喧騒の最中で、僕の生涯を決定づけてしまう薫陶を受けた。

「クロマトで世界水準のお前に合成知識の有無は関係ないやろ！その能力を認めんほうが会社の損失やないか。お前は変革のプロとして、素人の野次に耳を貸すな。俺が今すぐ騒音を止めてやる。だからお前はこれからもこの道を進め、俺がいなくなっても。」

発想が突き抜けすぎて有名だった当時の所長は、僕にこの言葉を残した翌月の春、定年退

職された。AKB48の話が好きで、変なおじさんと決めつけていたことを謝り損ねた。

僕は加藤さんとまた野望の続きを話したい。あのときの言葉は、今でも僕の原動力です。

劇場型イノベーションの興しかた

「他者の人生を生きない。突き抜けるためにステ振りした」

ロールモデル

松木 安太郎さん：サッカー解説者（ですか？）

影響を受けた恩人

加藤 化学研究所長（当時）

気が向かないロールモデルには従わない。目指さない。
誰が何と言おうが、他者の人生を生きたくなかった。だって、だってなんだもん。
松木安太郎さんの突き抜けぶりが、やけに眩しかった。
一番シンドイとき、加藤所長の言葉に救われた。



ところで僕は、辛口解説者として突き抜けているセルジオ越後さんの大ファンでもある。日本サッカーの発展に絶大な貢献をされた方であり、松木さんとは違う形で「溢れる愛情」を感じる。セルジオさんを偶然見かけたことがある。東京駅の新幹線ホームで厚かましくも声をかけ、握手してもらった。こうした感激は、意味もなく誰かに伝えたくなるものだ。そこで、腹心の部長に伝えてみた。彼女は「了解しました。」とだけ答え、すぐに僕が忘れかけていた幾つかの対応リストを淀みなくリマインドしてくれた。敏腕にも程がある。

その数日後のハナシだ。取引先との会食に少し遅れてきた彼女は開口一番、自らが塩対応したエピソードを切り出した。当事者である僕を差し置いて、それも誇らしげに。

「聞いてくださいよお。うちの社長、有名なサッカーのヒトに会って握手してもらって喜んでいました！えっと、サル知恵？越後屋？なんかそんな感じのヒトですよ！ねえ社長！」

故意かどうかに関係なく、突き抜けた悪口である。憧れの人は、悪徳商人に括られた。

事前の申し合わせもなく、立ち合いから強くあたるヒトが、ここに居た。

僕は、彼女のために生ビール中ジョッキを注文するか、その無垢な暴言を訂正するべきかの選択に迫られていた。

【了】